

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	MUNKHJIN Anara (ムンフジン アナラ)
論文題目	精神分析からみた歴史と社会 ～モンゴルの歴史と文化と思想構造に関する考察～		
(論文内容の要旨)			
本博士学位申請論文は、社会が構成されるにあたっての基本原理は何かということと、人間が自国の歴史にどのように自分の人生に関わらせてゆくのかという問題意識のもとに、これまでの精神分析の考え方を調査し、その結果を申請者自身の母国であるモンゴルにおける思想構造に照らし合わせることによって、民族の同一性の形成の過程を論じたものである。 モンゴルの歴史には、古い歴史をもつ遊牧の諸民族をチンギス・ハーンが強大な国家にまとめたということのほかにも、清朝による統治やソ連の影響力の下での人民共和国の成立という変遷を経て現在のモンゴル国となったという経緯があり、さらに文化的にも古来の遊牧民族の倫理思想とチベット仏教からの影響という両面的な思想構造を併せもつ。本論文は、これらの一見すると偶然的に見える歴史から、精神分析の概念によって裏付けを与えながら一貫した理解の軸を抽出しようとするものである。序章においては、そうしたモンゴルの歴史の中から、チンギス・ハーンの存在にとくに着目して、精神分析理論におけるモーセの位置と比較する意図が述べられる。 第Ⅰ章「精神分析における三つの神話をめぐって」では、フロイトによるモーセ伝説の再構築、エディプスコンプレックスの概念、そして同じくフロイトのトーテムとタブーという集団的現象への洞察を振り返り、これがモンゴルの歴史のなかに見出し得るかどうか考察されている。とくに、精神分析のモーセ伝説の再構築とトーテム再考を併せて考えるとモーセという父親像がトーテムとしての質を帯びてくることや、父から子への文化的伝達様式の発生機構としてのエディプスコンプレックスの質が重要視されている。これらの観点からは、チンギス・ハーンが存在は、モンゴル民族にとって父性像であるのはむろんであるが、さらにチンギス・ハーン自身がエディプス的な存在として、父からの文化的遺産を受け継ぐ機能をもつようになったという面があることが明確化されている。この場合に、チンギス・ハーンに受け継がれた文化的原理は、モンゴル独自の「テンゲリ」(天)という概念によって表される。チンギス・ハーン的生活史には、闘争の前史があり、そのなかには、民族の婚姻規則の構造上、潜在的に父親の立場に来ることがあり得た人物の殺害という事件が含まれているのである。このエディプス的な側面により、チンギス・ハーンが父性原理としての「テンゲリ」に連なる存在であることの精神分析的な根拠が見出される。しかも、トーテムとしての狼を祖先にもつという神話的要素が、このチンギス・ハーンの伝承の代表者としての地位を強めている。 第Ⅱ章「精神分析における同一性の概念」では、精神分析において論じられてきた同一性の概念が、モンゴル民族におけるチンギス・ハーンへの同一化による同一性の形成にあてはまることが論じられている。本論文ではフロイトによる同一化概念と、エリクソンによる同一性概念の連続性が確認され、ついでフロイトの自我理想の概念が、エリクソンのいう同一性の形成にあたって重要になることを指摘して、その意味における自我理想の機能が、モンゴル民族においてはチンギス・ハーンの人物像によって担われていることを、歴史研究の文献から確認している。モンゴルの統合性の象徴がこの人物像であり、モンゴル民族の人々は、この人物像を父親的なものとして内面的に捉えて、それに同一化することによって同一性を形成しているということが論じられている。			

第Ⅲ章「モンゴルの歴史と文化における特定の点」では、第Ⅰ章と第Ⅱ章で述べた精神分析からみたモンゴルの歴史が、今度はその歴史の特定の点に立脚して歴史そのものの側から述べられ、精神分析の考え方がどれほど妥当するかが確認される。まずチンギス・ハーンという存在に関して、彼が長くかつ広く存在していた遊牧民族をまとめたという歴史的な点についてであるが、チンギス・ハーンは家族内での殺害を敢行しながらもそれが復讐の連鎖を生まず、むしろ天意による支配という理念を生んだ。それが可能であったのは、その殺害がエディプス的であり、それゆえ友愛という社会的紐帯の原理を広めるための要の位置に彼が来ることを助けたからであると考えられる。またこの際の天意については、もとは「自然」を重ねずるシャマニズムの色彩が強かったとはいえ、そこにチベット仏教からの「転生活仏」の考えが入って、「天」が「仏・菩薩」と融合して、さらにそこにチンギス・ハーンの家系が重ねられた。この精神的な流れは、ソ連による影響の強かった時代にも消えなかった。この経緯は、モンゴル民族の内面に、精神分析が自我理想として概念化している機能が、チンギス・ハーンの人物像を核にして受け継がれたから可能であったと考えられる。

第Ⅳ章「ラカンの精神分析理論における社会に関する思想」では、主に鏡像段階論を用いて、第Ⅲ章で論じたように強力に機能した自我理想が、どのように形成され得たのかを考察している。そして、鏡像段階において主体のなかに設立される社会的理想は、言語のまとまりとして形成されているということに着目する。そして、矛盾のない意味を人生に生みださせる言語のまとまりというものと、上に論じた「テンゲリ」とがモンゴル民族においては重なっているのであろうと捉えるのである。

第Ⅴ章「精神分析からみた歴史と文化」では、ふたたび精神分析の側から、個人と社会の関係をみて、個人のうちに社会が内面化されるプロセスに関して、幼児期からの発達を含めて着目しておく必要があると論じ、終わりに、これまでは「神」になぞらえて見られがちであった「テンゲリ」というモンゴル民族にとって大切な概念を、幼児期からの発達という観点からみることができたと述べて、論文を閉じている。

(論文審査の結果の要旨)

歴史や社会と個人との関係を精神分析の側から見ようとするとき、フロイトの議論がそうであるように、神話的にみえる記述を行うことになることが多い。しかしよくみると、むしろそこでなされているのは、個人の発達の心理と集団形成の心理の同型性の発見の記述と、その同型性がもつ意味の検討である。そうした精神分析理論の質を生かすならば、ある民族の有する個別的な心性を、必ずしも因果論的にではなく、構造的に個人の心理的発達と関連付けることが可能になるであろう。

本論文も、そのような見通しの下に、モンゴル民族がそのなかで生きている歴史観や宗教観を、精神分析の概念装置を用いてより深く理解することを目指している。

精神分析的歴史学とでもいうべき体系的な学はいまだ存在していないから、この目標のためには、相互に密接に関連する精神分析概念を自ら組み合わせて、まずその組み合わせの妥当性を吟味したうえで、特定の歴史的事象の理解に生かすことを試みるという手続きが必要になる。

本論文では、第Ⅰ章においてこの手続きを行っており、精神分析の理論的記述の中から、とくにフロイト自身によって再構築されたモーセ伝説、フロイトによって概念化されたエディプスコンプレクス、そしてフロイトによって解釈されたトーテムとタブーを取り上げている。これらが個人の内面の父性像と関係するものであることを手掛かりにして、それらの間に内的連関を見出し、その上で、モンゴル民族の歴史観や宗教観との同型性を検討しており、単に単独の精神分析概念を当てはめてゆくかつての精神分析的文化的解釈とは異なる方法意識が示されている。

その結果として、モンゴルの父性像として大きな存在感を有するチンギス・ハーンは、モーセのように民族の象徴としての意味を担い、かつトーテムとしての狼の神話に連なっていることがまず指摘されるが、ここで新たに取り出されているエディプス的な側面は重要である。必ずしも父を殺害するというのではなくとも、婚姻規則上、父にあたる座を占めに来るかもしれない人物を殺害するというものをもってエディプスコンプレクスの存在を措定することができるであろうという視点は、構造論的な見方によって初めて可能になるものであって、チンギス・ハーンという人物の民族的な位置づけを考える上で、発見的な重要性をもっていると言ってよい。

また、もう一つの重要性は、「テンゲリ」というモンゴル民族の概念を、精神的に捉えていることである。この概念は、「空」を意味するというその意味内容からすると神話的で擬人的にみえるが、実際には非常に抽象化された原理を表現している。したがってモンゴル民族にとってのチンギス・ハーン的位置を、彼が生まれるにあたって天体の作用があったと暗示する神話のエピソードも併せ、この「テンゲリ」と重ねて考えてみると、チンギス・ハーンには、モンゴルの人々それぞれにとって、内面的でしかも自然と一体となった父性像を担う歴史的理があることが明らかになってくる。

そして、第Ⅱ章において論じられているように、この父性像は、父への同一化による同一性(アイデンティティ)構築と関係していると考えられ、モンゴルの人々が、ソ連による政策を脱して再び家系の名前(姓)を名乗れるようになったときにチンギス・ハーン血族の名前を名乗ったということは、モンゴル人の同一性にとってチンギス・ハーンがいかに重要であったかを示している。すなわち、精神的に内面の自己同一性を確保するためには、チンギス・ハーンという自我理想が必要であったということが精神的に知られてくるのである。

第Ⅲ章の議論においては、モンゴルの宗教史の、精神的に重要な一コマが取り

上げられている。それは、チベット仏教がモンゴルの人々の精神生活に影響していたということである。そして、上記の「テンゲリ」という概念のもつ自我理想の機能が、別個の宗教が入って来てもそのままモンゴル民族に受け継がれ、チンギス・ハーンの人物像を核心として強化されて生き続けたという見解が述べられる。遊牧民族における宗教形成とその伝承が、まわりの国々からの政治的影響力の強さにも拘わらず独自性を保ったまま行われたという、筆者自身の母国に関するこの意見は、精神分析の概念装置を多層的に用いたことによって、客観的にも首肯できるものとなっている。

続く第Ⅳ章と第Ⅴ章においては、さらに鏡像段階論が適用されることによって上記の自我理想としての「テンゲリ」が内面的な精神生活に根を下ろしうることについての発達論的な説明がさらに厚くされ、「テンゲリ」という概念が長きにわたり民族の精神的な支柱ともなれば個人の内面的な支柱ともなってきたことが明らかにされる。

モンゴル民族の精神生活に関するこのような精神分析的な解明により、本論文は、モンゴル民族の独自の文化をこれまでとは違った相貌で捉え、さらには他の文化との比較を促すものとなっている。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年8月13日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。